

ニッポン ドクター和の 臨終図巻



長尾和宏（ながお・かずひろ） 医学博士。東京医大卒業後、大阪第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。この連載が『平成臨終図巻』として単行本化され、好評発売中。関西国際大学客員教授。

達の身近にある死です。

現在、我が国で自殺をする人は年間2万人強といわれています。警察庁の統計によれば、この10年あまり年々減少しているとのことですが、果たしてそれは真実だろうか、在宅医としては首を傾げざるを得ません。というのも、死因がよく分からない、いわゆる不審死は年々増

えているからです。たとえば、昔ならば紙に書き残して現場に置かれていた遺書も、パソコンのどこかに保存されているだけなら、自殺と判明するまでに時間がかかる場合があります。

また、今年年間3万人ともいわれる孤独死の中にも、セルフネグレクト、つまりは緩やかな自殺行為の果てに亡くなる方が多くいるように感じます。つまり、実情は自死であるのに、自殺とカウントされない死が増えているのではないかと、という懸念があります。

不寛容社会という言葉が流行するほど、日本は弱肉強食の冷たい国になりつつあります。ある日突然、生きる希望を奪われ社会から孤立する可能性は誰しもあります。その背景

にSNSの存在があるのも否定はできないでしょう。奇しくも三宅さんの自殺が伝えられた同日、新宿駅南口の歩道橋で首を吊った人がいました。多くの通行人がその姿をこぞってスマホで撮影している映像を目にしました。自殺さえもリアルタイムでSNSに消費されていく時代かと、しばし言葉を失ったのは私だけではないでしょう。三宅雪子さんもツイッターをめぐるトラブルが起きていたようです。それがどこまで死に影響しているかはわかりません。しかし、SNSはときに人の心を破壊します。

これは昨年12月28日に彼女がツイートした言葉です。かつて小沢ガールズとして注目を集めた元衆院議員の三宅雪子さん。1月2日に東京都内の海岸で遺体で発見されました。遺書のようなメモも見つかったことから、警察は入水自殺とみています。享年54。

有名人の自殺は、センセーショナルに報道されがちですが、自死というのは、思いのほか私

元衆院議員 三宅雪子

139



「見捨てない社会」つづやきを遺し

「乗り越えられない人を見捨てない社会にしたいですね」…12月30日にそんな呟きを遺して、三宅さんはこの世を去りました。

三宅さんの訃報の後も、とある作家が彼女の死を揶揄するツイートをしていました。どんなに立場が異なるうが、死者を唾うのは人として大変恥ずべき行為です。

有名人の自殺は、センセーショナルに報道されがちですが、自死というのは、思いのほか私